

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第52号

平成29年7月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

楠正行に遺腹の子がいた

池田教正のりまさと名乗り、池田家を継ぐ

野瀬庄の内藤満幸の娘を妻に

正行通信51号で、正行に遺腹の子があったとするお話を紹介した。その概要は、以下の通り。

正行は摂州野瀬庄の野間城主・内藤満幸の娘を妻に向かえた。子どもをもうけたが、2年余りで早世した。

正行戦死後、正儀は正行の妻の実家、内藤満幸の足利方寝返りを怒り、子を宿していた兄嫁を実家に帰した。

実家に帰った正行夫人を、妊娠承知で妻に向かえたのが池田城主九郎教依（のりより）で、生まれた子は池田六郎教正（のりまさ）と命名され、その末裔が代々池田家を継いだ。摂州池田氏、備前池田氏、鳥取池田氏は、すべて正行に連なる縁を持つ。

岡山市操山に残る三勲神社址

岡山操山の山腹には、かつて三勲神社があった。

和気清麻呂、児島高德そして楠正行が祀られていたが、何故正連がここにといふかる人も多かったが、備前池田氏が正行の末裔という事であればうなずける。現在は、礎石の石畳だけが残っており、三勲神社跡地と記した看板が立つのみとか。

正行に、遺腹の子

「うちの家系図は、正行が結婚していたことが大前提。内藤家の娘を嫁にもらい、正行の子どもを身籠ります。その子とも、池田教正の末裔が、三重県に出向き、内藤の藤と池田の田で、「藤田」正澄と名乗ったのが、私の家祖です。」

このように語られる藤田力弥氏（岐阜県山県市在住）が刊行された『楠公夫人精説』に、この件を拾ってみましょう。

<楠公夫人精説概要>

正行と弁の内侍は、お互い相思相愛と伝わる二人だが、この縁談は実らなかった。

その後、正行は、摂州野瀬の庄内藤左衛門尉満幸の娘を娶った。息子の死期が近いことを感じた久子が、子孫を残すため段取りしたのか定かではないが、四條畷で正行が果てたとき、妻は正行の子を身籠っていた。

楠公夫人に初孫を見せることなく楠家を去った内藤満幸の娘である。

実家に帰った後、すべてを受け入れてくれた播州池田の池田教依（のりより）に嫁ぐ。

池田教正、幼名は多聞丸

そして、生まれた正行の寵児は、祖父正成、父正行と同じく、幼名を多聞丸という。池田家の当主として立派な武将となり、池田教正（のりまさ）として、皮肉にも幕府に帰順した楠正儀とともに戦った。

池田系図によると池田氏はもともと紀氏流であるが、池田奉政の孫で教依は楠正行の遺児教正を引き取り育てた。その子佐正が池田氏を称し、摂津に住した。

池田氏は、楠帯刀左衛門尉正行 河内の四條畷の合戦に討死なり。その室は摂州能勢の住人内藤右兵衛尉満幸の娘なり。

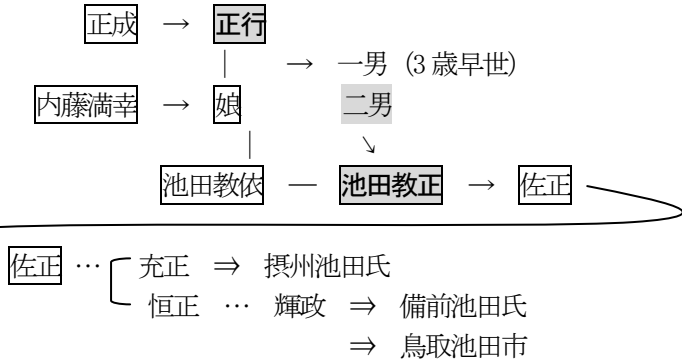
嫡男多聞丸は4歳にて早世する。

正行討死の後、満幸不義の振る舞いあるによって、正行弟左馬頭正儀是を憤りて、正行後室を父の満幸許へ送り返す。その時後室は懐胎なり。同国池田九郎教依に結縁し妻と為て、ほどなく一子を産す。その後室に子無し、教正池田の家を督く、その子佐正より代々相続き、子孫繁栄す。

・・・明応2年（1493）、池田教正の子か孫の池田正澄が摂州池田城から来国、山口玉垣城を築き藤田当麻之丞と称した。（藤田は、池田と内藤の両名を取った姓と伝承）

正澄の孫、善澄の時落城し一族は四散。善澄の四男善行は、藤田市左衛門と改名し、濃洲枚方知郡に隠棲した。

藤田市左衛門善行が藤田力弥の家祖。



岡沢新吾論文、まず日本姓氏大辞典

次に、地域文化誌「まんだ」2004年春夏第80号に掲載された『楠正行遺腹の子』（岡沢新吾）の概要を見よう。

— まず、遺腹の子の意味だが、父の死後に生まれた子（広辞林）とある。

日本姓氏大辞典の10ページ、池田氏の項に以下の記載がある。

『池田氏美濃（景行帝裔の稲紀氏族）池田奉政の末孫、摂津の国住人九郎教依は楠正行の遺腹の子を養って十郎教正と名づける。

その子を佐正といい、佐正の子を六郎という。それより数代継いで摂津の国に居住する。恒利はその後裔であるといわれる。

寛政系譜には本支十六家を載せる。

嫡流は恒利—信輝—輝政—利隆—光政—利隆—光政—綱政—八氏略（岡山藩52万石）…』

とあり、摂津の国池田城主、池田九郎教依が楠正行の夫人が妊娠していたことを承知で城に迎え、月満ちて夫人が出生した子を実子同様の愛情をもって育て、十郎教正と命名し、以後子孫が堅実に栄え多くの本支流をえたということが分かります。

次に、東郷村史から引用

次に、東郷村史（昭和27年改訂版）には、以下の記載がある。

内藤氏系譜として

内藤満幸（伊賀の守、野間城主）	—	満重
	—	満房
	—	女子

付旧記に太平記評判書之世系に

- ・上略—正成—正行—多聞丸（早世3歳）
- ・母 摂津野瀬庄（能勢庄）住内藤右兵衛満幸有仁
勇嘗之故因故判官之命而為正行室
正行戦死後満幸不義之行以是正儀之追捨父家
此時室孕一子嫁同国池田九郎国依池田之養所
産之子而号池田十郎教正…

とあり、これによって正行夫人は内藤満幸の一女であり、実父満幸は仁勇の人であって遠く河内の国にも知れ

ておったのです。

千早・赤坂に城を持つ楠木氏と似合いの家格であったこと、ともに南朝方であることから正行の父、正成在世の折から能勢、野間城主の女（娘）を正行の室にと望んだのでしょう。

やがて結婚した正行には待望の男子が生まれましたがわずか2年余りで早世しました。

正行戦死後、夫人の実家、内藤満幸は「不義之行」とあります。この場合の不義とは、以前は敵であった足利方（高師直方）に味方することでしょう。

源家の足利、源家の系統をひく能勢地方の豪族は正行らの死で急激な南朝方の退勢を見て、足利方になびくようになったのはやむを得ない行動だったでしょう。

正行戦死後末弟、正儀が楠一党の総帥でした。正儀は裏切り行為の満幸を激しくなじり、このような内藤氏の不義に憤激して子を宿した兄嫁（正行夫人）を実家に帰す挙に出ましたが、今少しの慎重さがほしかったと思います。

今一つの引用、本朝通鑑

本朝通鑑

正行娶摂津野瀬庄内藤満幸女生男、号多聞丸、正行死時三歳、（早世）又有遺腹子乃正行死而満幸屬高師直、正儀怒而歸寡搜於満幸嫁之於池田教依而生男於池田家実正行公子也号池田六郎教正後細川頼之顯戦功子孫昌池田氏…

実家にあった夫人にあたたかい手を差し伸べたのが池田城主九郎教依でした。

能勢庄、野間城に帰った夫人に縁談が話され、父満幸の強い要請で池田城に迎えられたのです。もちろん夫人が妊娠していることも承知で教依は迎えたのです。

この子が池田十郎教正と命名され、長ずるに及び武勇すぐれた武将になったことは前述のとおりです。

岡沢新吾は、日本姓氏大辞典、東郷村史、本朝通鑑等を引用し、楠正行に子どもが残されていたことを記しているが、これはまさに藤田力弥氏の論と符合する。

● 備前岡山の楠正行 三勲神社 ●

岡山の操山の山腹に、かつて三勲神社があった。

祭神は、和氣清麻呂、児島高德、楠正行の三人である。

明治8年、地元有志によって創建され、毎年4月11日に大祭が行われてきた。しかし、昭和26年、取り壊されて、わずかに礎石の石畳だけが残り、三勲神社跡地と記した看板が建つのみという。

しかし、和氣清麻呂と児島高德は岡山・備前の出身で、何の不思議もないが、何故、楠正行が入っているのか？

備前池田氏の系図と摂津池田氏の遠祖の系図を重ね合わせると、摂津池田氏は楠正行を血統上り祖先とすることとなり、備前池田氏はその末裔ということになる。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）